分枝 branching
http://branching.jp
branching 10 publish : 09,September.2014

通じる昆虫

Nami GOTO 1969~
ごとうなみ

　久しぶりの山で昼間からひとりで焚き火をしていたら一羽の鳶が上空を旋回した。チームベンチに寝そべっていたのでそれがよく見えた。手を伸ばして「ここだよ」と合図をしたら鳶は二階建ての屋根より少し高いところまで降下してきて品定めをするように焚き火と私をぐるぐる回ってまたさっきと同じように上空へもどって旋回した。しばらくしてまた同じように大きなぐるりをつくりながら今度はゆっくり降下してきた。鳶と私の目があった。「油揚げはないよ。」「獲物はいないの。」起き上がって念じたらもっと近くに来るかなと思って念じてみた。でもそれ以上には来なくてやがて鳶と私の興味が互いに薄れた頃林の方へ飛んで行って消えた。野生だしな。獲物がいなければ用なしだよなと納得して野生の本気ぶりを模倣してみた。

　そういえば以前住んでいた山の家には黄色スズメバチが２階南側の窓辺に大きな巣をつくったことがあった。注意して見ていなかったけどきっと春先には小さな巣からスタートしていたんだろうと思う。夏ごろに気付いた時にはそれは見事な巣になっていて黄色スズメバチ達は雑草が生え茂る庭を忙しく飛び回っていた。でも、なんというか、私には持論があって「蜂は気が通じる」と思っていたから特に巣を退治するとかするでもなく、お互い差し障り無く共存していた。当時こどもたちは多分小学生と保育園くらいだったかな。「蜂は怖がるとピクッて反応してこっちに興味をもつから普通にしてたらいいからね。まったく気にしなかったら蜂も全然気にしないんだからね。こっちが「やべっ！」とか「怖いっ！」とか思った瞬間にその気が蜂に伝わって蜂は「ん？何何？」って反応してくるから、もしそうなったらいつもどおり気にしないように気持ちを落ち着かせるようにするんだよ。そしたらそのうち蜂もまたいつも通りに戻るから」と教えていた。でもホンマそうなんや。黄色スズメバチは結構大きかったけど私達家族を一回も刺すこと無く秋に一生を終え死んでいったし。彼らの気配が無くなった頃、残された大きな巣の中身が気になって煙でモクモクした後から友達のよし君にのこぎりで取ってもらった。大人の女性（私）が両手でちょっと重たいと感じるくらいの重さで胸を広げてようやく抱えられる位の大きさ。のこぎりで縦にまっぷたつに切ってみたら外の柄と似たような迷彩状の小さな室がたくさんあってそこに蜂の幼虫が沢山いた。気持ち悪かったなあ。でもきれいやった。固唾を飲みながらずっと見入ってた。最後ためらいも無く焚き火にくべたけど、後から聞いた話黄色スズメバチの巣は結構縁起ものだったらしくとっておいたらなにか良いことおこったかもしれないなあ。でもまあ燃やして正解だったと思う。

　通じる昆虫でいえば蠅も通じる。残飯を庭の隅に土ほって埋めていたから夏場になると蠅が数匹飛んでくるんだけど、蠅は殺気感知能力がさすがに高い気がした。（成虫蠅の場合だけど）ブンブンブンブン顔の周りをまとわり飛んでいていい加減しつこい時一瞬本気で「殺す」と思うと途端に蠅はサーッてどこかへ姿を消す。殺気を感じ取ったんだと思う。ポイントは本気で「殺す。」と思うこと。本気度が低いと甘く見られてまとわりつくのをやめないから。あとタイプは違うけどカマキリは宇宙人だと私は確信している。彼らは意思の疎通が出来るというより人間をコントロールするだけの超能力などを隠し持っている気がする。一度こどもたちを保育園へ送ったあと部屋に掃除機をかけていたら２階の奥の当時アトリエにしていた部屋のちょうど真ん中にカマキリが居た。土色のカマキリでたぶん老虫（って言うのか？）。見つけて一瞬「うっ・・」と部屋に入るのをためらったけど（昔からカマキリが苦手だったので）ピクリとも動かへんかったしもう死んでると思って、意を決して掃除機で吸おうと覚悟して部屋に入って行った。ノズルをカマキリに近づけていざっ！ていう距離になると弱気な私がへこたれて「あかん！できひん！」としどろもどろ右往左往していた時、そのカマキリが鎌を持ち上げて抵

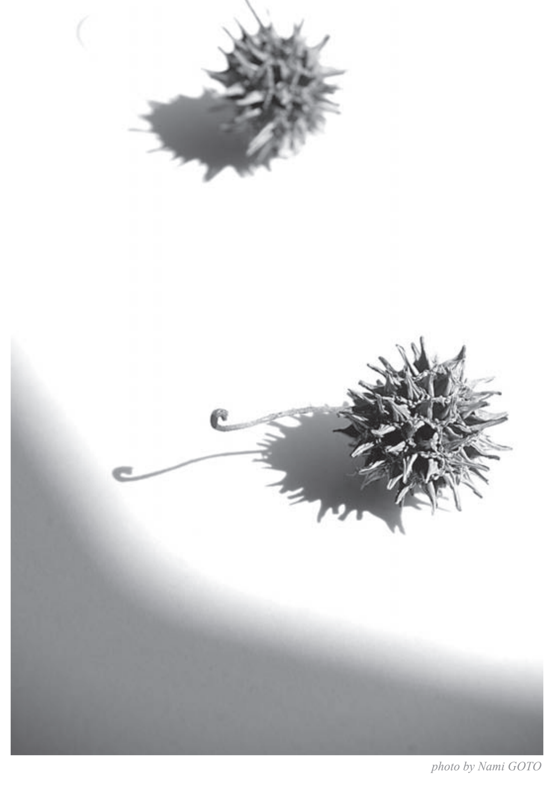


photo by Nami GOTO

抗の姿勢を見せた！「ヒエ〜〜泣」掃除機を放り出して階下へ逃げ近所のみおちゃんに電話した。「ん。じゃあ行くわ」と言ってものの数分で来てくれてすたすた部屋に入って手で、手で！掴んで窓から投げ捨てた。「なみちゃんな。掃除機で吸うほうが残酷やで」と捨て台詞を吐きすぐ帰って行った。掃除機で吸ってしまわなくてよかった。吸ってたら今頃呪われていたと思う。絶対そうやと思う。そのくらい彼の鎌挙げには生命渾身の迫力が込められていた。だからカマキリも通じる昆虫だと思う。

　通じない昆虫もいる。ミミズ。下の子がまだ２歳の時草むしりをしていた私の傍らに立ってた。彼はいきなり何を思ったかしゃがんでミミズを捕まえた。しかも相当大きいサイズで太さも小指くらい。むしろ作業に夢中になっていた私はそれに気がつかなくてでもふと後ろを振り返った瞬間その姿が見えて動揺した。「ア”〜!!!」としか言えなかった。しかしその声に何故か息子のスイッチがどこかに入ってしまってそのミミズを食べようとした。私は、もう死にそうになった。言葉は出ないね。あんな時には。ぐお〜〜〜汗とかそういった音しか出せなかった。叫びか。けどその気迫のおかげで息子の手がゆるみポタッとミミズを落としたから難事を免れた。ミミズを食べていたら以後同じように彼を愛してやれたか到底自信がないけどミミズは絶対通じないなと思った。こうして思い出すと山は虫だらけやったなあ。虫だけじゃなくて空も風も木々も狸も雉もリスも野うさぎもそういう自然の中に住んでいるいのちたちがとても身近にいて知らぬまのいつでも会話していた気がする。

　さっきのチームベンチに寝っころがりながらさっきの鳶今日はもう戻って来ないかなとぼんやり想っていた。起き上がると部屋の窓から良い匂いがしたのでさっきの鳶のことを話そう！と思って家の中へ入った。つくってくれた美味しい昼飯を食べながら鳶のことを話していたら雨が降ってきた。焚き火の残り火もこの雨で消えたようだ。
雨も通じる気がする。気持ちが現れる。洗われる。

ごとうなみ　Nami Goto
美術家
1969 年生まれ長野市在住
http://nami-goto.jimdo.com

持病昔話

Sayoko FUNABASHI 1984~
船橋小夜子

物心ついたときから、布団に入ってから５時間くらいは寝付けなかった。
朝は目覚ましの音も、隣で寝ていた家族が起きる音も、何もかも全く聞こえない。起きられないのが怖くて、また、眠れない。
まさしく、睡眠のコントロールができない筋金入りの睡眠障害だった。

幼い頃の眠れない５時間は、当然暇である。
テレビは確か 20 時か 21 時までと決められていて、眠くなくても布団に入れられていた。
父の転勤で青森県内を何箇所かまわったが、どの社宅も居間と寝室が襖１枚だったので、布団に入っている間も頭上でテレビの音がガヤガヤと聞こえてくる。気になるのと、眠れないのにテレビも見られないことに腹が立つのとで、余計に眠れない。まあ、テレビを見たところで眠れたかどうかは分からないが。
襖を気付かれない程度に開けて見ようとしたが、気付かれてしまい、ちょうどその場所に座椅子を置かれてしまった。
いつもの手法で襖を少しだけ開け、耳をそば立てて聞いていても、映像は座椅子の生地のアップに取って替えられた。これでは肝心な情報が抜けた虫食いラジオである。ので、諦めた。

そのうち、テレビに替わるいくつかのエンターテイメントを自分に与えるようになった
それは日替わりランチのように選べるシステムで、今日は○○コース、となどと呼んでいた。

その一つが、泣き泣きコース (ネーミングが単純すぎて可愛らしいじゃないですか)。
泣くと疲れて眠るのではと考え、女優のように悲しいことを思い出し、泣いた。例えば誰かが亡くなったなど。今思うと凄い才能だなと思うのだが、少しずつ涙を出そうと頑張ると、そのうち何だか物凄く悲しくなってボロボロ泣けた。
コースのうちの一つに入るくらいなのだから、多分それで何回も眠れたのだろう。

別のコースは、名前は忘れたが、毛布やタオルケットにプリントされた模様の中に空想で入り込み、遊ぶコース。たぶんこれがメインで使われていたようだ。
知っている人がどのぐらいいるか分からないが、NHK のテレビ番組「みんなの歌」で放送されていた『メトロポリタンミュージアム』の歌中にある、＜大好きな絵の中に閉じ込められた＞という末恐ろしい歌詞に感化されたと思われる。
私に充てがわれていた薄ピンク色の毛布には、可愛らしいタッチの動物がペールトーンで描かれていた。マンションのようにそれぞれの部屋があり、思い思いの暮らしをしている人間風の服を着た豚などの異なる種類の動物が計４匹いて、各部屋に遊びに行くというもの。つまり、毛布の中に自分が入り込むということである。
動物たちと何を話したのかは覚えていない。そして何故か４匹のうち豚しか覚えていない。

また、コース外になるが、たまに身体に変な感覚が訪れるときがあって、それが金縛りのように (未経験ですが) 不快なので、それを解除するのに時間を使った。
気持ち的には爆弾処理班のそれである。かなりの神経を要する。
変な感覚、とは、指を曲げたり伸ばしたりすると、皮膚の感覚がなくなって、骨だけになっている、というもの。
指を擦り合わせると、冷たくて筋が張ったような、金属でできた骨がむくんでいるようだった。
解除と言っても、指と感覚を極度に刺激しないように、絶妙なバランスを保ち、過ぎ去るのを待つだけなのだが。

高校生の時分には、私は“バスを追いかける人”として知られていた。理由は勿論、起きられずバスの時刻に間に合わないからである。
家から坂を下った両左右の道沿いにバス停があり、それぞれ歩いて５分もない距離だったので、どちらも使っていた。
時刻ギリギリに家を出るので、その坂を下ったところが勝負だ。バスの姿を確認し、どちらのバス停へ行くか瞬時に判断を下す。この決断がすべての鍵（遅刻を免れる）を握っている。
向かって左側のバス停を振り返り、絶対に逃してはならないバスの姿を確認すると、向かって右側の次のバス停まで、全力で走る。暫しバスと人間とのスピード勝負だ。間一髪でバスへ乗り込む。私は陸上部だったので、自主的な朝練だ。
同じバスに乗っていた弟の友人が見ていたとのことで、恥ずかしいから止めろと弟にいつも咎められていた。

働き出してからは、たまに一睡もしないまま、一人オールでハイテンション (心の中でだけ) で仕事をこなしたことも幾度となくある。
当日は 18 時あたりからキツイものの、テンションで乗り切れるのだが、次の日が尋常じゃなく辛い。身体も頭も重く、機能しないまま働く羽目になる。
副作用のあるあたりが違法ドラッグのようだ (もちろん未経験です)。
薬をやろうとする人がいたら、こちらのほうが無料でできるのでオススメすることにする。

様々な工夫をして睡眠障害と仲良くしてきた私も、今は大分快方に向かっている。が、油断は禁物だ。
気を抜くと、また遊ぼうとやってくるのだ、あの面倒な友達は。

船橋小夜子 Sayoko Funabashi
クリエイター
1984 青森県八戸市生まれ
2009 桑沢デザイン研究所 卒業
モバイルサイトデザインを経て呉服店勤務を経てフリーター
funabashi335@gmail.com

無題

Genta MARUYAMA 1982 ~
丸山玄太

　私がその半身を失って目にした光景は、それでも色づく世界でした。灰色に染まると聞かされていた世界は、相も変わらず色づいたままで、寧ろ以前よりも鮮やかで、明瞭でさえある。見えるものすべてを仔細に見澄ましても、綻びの糸口すらみつからないこの強固なまでの普遍性を持った世界は、脆弱で儚く崩れ去った私の見ていた世界と同じものだったのだろうか。身体を、腕を、手を、指先まで思い切り伸ばしてみても、今では触れることすらできないこの世界と。
　燻らせた紫煙も世界から色を取り去ることはできず、酒も鮮やかさを膨れ上がらせるばかりで、失った半身を埋めることも、忘れることも、世界を元に戻すこともできない。耳鳴りと目眩をあちらからの交信のように抱きしめ、夜と契りを結んだ私に、昼が暴行を繰り返す。瞬間を永遠と感じさせるように。前進を後退と感じさせるように。
　私は半身を求めて彷徨う。嗚咽すら呑み込む必要のない静寂の中で、世界をこれほどまでに鮮やかに、眩しく見せる暗闇の中で這い続ける。ここから見る世界は、何と美しいことだろう。ただひたすらな存在だけがある。これほどまでに残酷な選択があろうか。痛みも、苦しみも、生も死も遠のいた観念への魅力。しかし、表皮を剥ぎ取られ、肉を削りながら、それでも、脆弱で儚い世界に存在することを私の半身は求める。欲望と幻想と残虐の世界を。いつまた崩れるともわからぬ色づく世界を。いつか、両の足で地面を踏みしめて、両の腕で愛する者をきつく抱きしめるために。

丸山玄太 1982 年長野市生まれ 東京在住 クリエイター
http://undergarden.com

photo by Chika MATSUDA

Rasi

Chika MATSUDA 1983~
松田 朕佳

魚を釣りに行こうよ、といって出かけた。まだ薄明かりが残る空にオレンジ色に大きく膨れ上がった、二十夜頃の月が浮かんでいた。ふかふかとした分厚い苔に足を沈ませながらゆっくりと歩く。緑色の足跡を残して森をぬけると湖に出た。私たち以外に人はいないようだった。土の上に蛍光に光る土蛍。一カ所に留まり消化をしているのか、ただ体をぐねぐね動かしている。岸につないであったボートを借りることにした。岸辺の小屋で釣り竿も二本見つけた。「子供の頃、叔父に釣りを教えてもらったときにね、バケツの中で釣った魚が苦しそうにもがいているのを見ていて、気がついたら泣きながら棒で魚たちの頭を叩き潰してたんだ」そう言って竿を持っていないサラは短い木の棒を拾い上げボートに乗り込んだ。風もなく静まり返っている湖面をゆっくりと進む。太陽はまだ西の地形線の少し下にいるようで姿は隠れていても、その光はまだ空の裾を赤く染めていた。波ひとつない湖は鏡になり空と湖畔の林をそっくりに映し出していた。オールが静かに水に吸い込まれていく。ボートが過ぎた後に立つ小さな波も湖の広さにあっという間に吸い取られてしまうようで、私たちは何とも接点のないところに浮かんでいるようだった。湖畔の林に隙間があるのを見つけた。川があるんじゃないかな。そういってそちらの方向に向きを変え進んだ。近くまでいくとやっぱり川だった。狭いが緩やかに水が流れ出している。小さな橋が架かっていた。陸に乗り上げボートを岸辺につないだ。橋に座って釣り糸を垂らす。各自のポケットからビールとタバコが取り出される。太陽は先ほどから高さは変わらないが少し東へ移動したようだった。水草が水面を軸に反射し小刻みに揺れている。足元を三羽のコウモリがバタバタと飛び回る。体内にアルコールを含んだ魚がいるって聞いた事ある？冬場に凍ってしまわないんだって。へー、ずっと酔っぱらってるのかな。飲酒スイミング。素面の人間の考える事の方がよっぽど危ないときもあるけど。日本の魚はすべて汚染されたの？うん。あ、釣れた！ヨンネが釣り糸を引き上げると 10 センチほどの小さな魚がかかっていた。針から外され水を張った赤いバケツに投げ込まれた魚はすぐに死んだようで微動もしなかった。しばらくして一匹の猫が現れた。藪の中からゆっくりとこちらの様子を伺いながら近づいてくる。白に黒斑と黒くふわふわと長い尻尾。白い両耳の間の二つの四角い黒い斑が短く切った前髪の様で、小さな黒い目をした人間の顔に見えた。人慣れしているのか 狭い橋の私たちの反対側を警戒しながらゆっくり渡っていく。おいで、おいで、魚をお食べ。バケツから魚を取り出し銀色にひらひら揺らす。お腹が空いていたようで手から魚をくわえ捕ると少し離れたところにまでいって食べた。全部食べてしまうとまた私たちのところへ戻ってきた。ぜんぜん釣れない竿を置いて猫と遊ぶ。名前をつけようよ。だめだよ、野生の猫に名前をつけたら。昨日も遅かったからそろそろ戻ろう。ボートに乗り込み沖に漕ぎだした。あの猫お腹空かせてたけど大丈夫かな。岸辺から離れると、ニャオ、と小さく鳴く声が聞こえた。やっぱり連れて帰りたい、戻ろうよ。このままだと多分心配で今夜眠れなくなるよ。そういいながらもボートは対岸へと進む。太陽はすっかり東の空まで横滑りして結局一度も沈まないま、また昇ろうとしていた。境目が分からない程に止まっている湖面に、ふと、こちらが映されている方の世界だったかな、と思わされてしまう。パラレルワールドの反対側にいるって気づいたら、洋服を裏返しに着ると戻れるんだって。そういってメリはピンクに緑と黄色のストライプのセーターを裏返し、袖に足を通してズボンにして寝た。次に目覚めた時にも、まだセーターを履いたままだったので結局今がパラレルワールドのどちら側なのか判断はできないようだ。

今回はアムステルダムに用事が出来たのをきっかけに、せっかく地球のこっち側にいるんだから少しゆっくりできるところはないかと聞き回ったところメリのところに行き着いた。メリとは数ヶ月前にバルセロナで会った。私がアーティストインレジデンスでバルセロナに到着したすぐ、スペイン語が話せないため英語が共用語だった唯一の場所であるフィンランド人の運営するアートスペースに入り浸っていた。そのアートスペースでの展覧会のためメリと別のハンナ、ヨンネが 10 日くらい来ていた。そのときの別れ際には、もう数年、もしかしたら二度と会う事が無いかもしれない、というような気持ちで、またね、と言い合ったのだが、その機会は３ヶ月後に訪れた。フィンランドの首都ヘルシンキから車シェアでリイナという女の子に拾ってもらい北東に車で約１時間半の村、Rasi に到着。60 年代に村の小学校として建てられ、その後ポリオ治療施設として利用されていた建物／家に昨年の秋からハンナ、マルコ、ヨンネ、メリの四人が住み始め、私は空き部屋の一つに夏至を過ぎた辺りから３週間ほど滞在した。一年で一番日が長くなるとき。夜の 10 時頃から散歩に出かけて、キノコやイチゴ、ブルーベリーを集めた。名前は分からない葉っぱ。この新芽に雨滴のようにのっているのは実は葉の水分がしみ出したもの。これはね、妖精のシャンパンといって滴をおでこに塗ると 10 才若返るんだって。私に薬草を教えてくれたおばあさんに聞いた秘密、とメリが教えてくれた。あった、こっちにも、と私たちは真夜中の森で妖精のシャンパンに酔いしれながら、日本昔話に欲張りおばあさんが若返りの泉の傍らで赤子になってしまう話があるよ、とお礼に教えてあげた。ついでにその日は７月７日だったので七夕の話もしたのだけど、白夜で星が見えない国の人々にはあまりピンとこない話のようだった。また別の日の午後 10 時、閉店後のスーパーマーケット裏のゴミ箱へダムスターダイビング（ゴミ漁り）。懐中電灯は無用。この近所はホームレスも少ないし、私たちが貰ってもいいんだよ。と、順序やマナーはあるちゃんと守る。パン、野菜、果物、チーズ、バラの花、賞味期限は切れてるけどまだ食べられるものばかり。有料なものがあるからゴミは無料で政府があるからアナーキズムがある。反発運動のエネルギーを発生させるには問題を仮定すればよい。本当の問題は、問題が無いこと。ありすぎる問題に誘発された問題は巨大モンスターの叫ぶ声のようにぎゃーぎゃーと私たちを捲し立てるけど、本当は問題なんて始めからなかったんだ、と気づけば叫び声も蝉の鳴き声のように風流ですらあるかな。しばらく気がつかなかったけどフィンランドの森の静けさは蝉の不在によるものだと分かった。10 年間を土の中で暮らし、最期の１週間を叫びながら終える蝉の一生を、蝉を一度も見たことが無い彼らフィンランド人は思い思いに想像を膨らませていた。湿度の高い日本の空気が何種類もの蝉によって振動させられて夏中ビリビリとしている様子を上手く想像できただろうか。蝉の抜け殻を集める経験の無いフィンランドの小学生は数十ページにもおよぶ押し花を夏休みに作り数十種類の“雑草”の名前を覚える。ぼーっとしていれば９時間であっという間に東京から来れる場所ではあるけど、空港間のテレポーテーションのようなものだから実際の距離や間にあるものを全く知らない。本当は繋がってるのに色々を飛び越える移動だから、あっちとこっちは断絶された二つの場所と時間のように錯覚してしまう。蝉は地上に出た一週間を移動になんか使わないんだろうな。バルセロナでうっかりさよならを言わなかったサッカリにもまた会えた。失恋に破れたハートを縫い合わせるように、ちくちくノルウェー語を勉強していた。ノルウェーの山奥に籠ろうと思って。ああ、そう。それで気がついたらまたいなくなってた。また、さよならも言わずに。移動中の私たちは、さよならという言葉で区切れないほど地面にくっついている。その場を去ることすらできていない。ただ延長線上に距離を置いて、近づいたり遠退いたり、いつの間にか死んでいたり二度と会わなくても、一度も会わなくても。５年くらい前にブルガリアで会ったローラという子が今はヘルシンキに住んでいる。時間があったら会おう、とのメッセージが届いたので帰り道、空港に向かう途中で数時間会うことに。フェイスブックのお陰で友達の現在地が分かるのは便利だな。Rasi から電車でヘルシンキ。駅に到着してウロウロ待っていると、おーい、と肩を叩かれ振り返る。誰！？わー、久しぶりー！ハグハグ。誰！？あ、これは違うローラだ！と気づく。４年くらい前にアメリカの大学に留学生で半年くらい来てて、最近はロンドンに住んでいたんだけど１週間前にヘルシンキに戻ったらしい。わーわー、と一生懸命共通の友人たちを思い出しながら話を合わせる。笑いをこらえながら結局人違いをしていたことは内緒にしといて、話を噛み合わせながらカモメ食堂でランチを噛みしめて、空港行きのバス停で見送ってもらった。モイモイ（フィンランド語でバイバイ）。

松田朕佳　Matsuda Chika　1983 年生まれ　美術家
ビデオ、立体造形を中心に制作。2010 年にアメリカ合衆国アリゾナ大学大学院芸術科修了後、
アーティストインレジデンスをしながら制作活動をしている。
8/3~9/30 マツシロオルタナティブ / 池田満寿夫美術館中庭
www.chikamatsuda.com

illustration by Yu KOJIMA

#young poem club 01

Yu KOJIMA 1991 ~
こじまゆう

喉がカラカラだ。
花よりもまず自分の喉に水をくれよう。
昼ご飯は食べなくてもいいから
それよりも、遊ぼう　遊ぼう
５時になったらもっと遊ぼう
お腹が空いたら適当にやるから

それよりも、踊ろう　小振りなステップで笑いを誘おう
話そう　可愛い秘密を教えて欲しい
歩こう　細い道を進もう
歌おう　誰にも聞かれないように自分だけの歌を歌う
ああ、眠くなったから眠ろう　目をつむって体を伸ばそう　安らげば
どこだっていい
((夢の中でつぶやく))

” play for me”
ブランコをこぐ
私の為に
” play for me”
スケートボードをこぐ
私の為に
“play for you”
舟をこぐ
あなたのために
< そして朝になる。>

こじまゆう Yu KOJIMA
1991 年小布施町生まれ
yu.kojima1013@gmail.com

photo by Takeshi YODA

青さ

Takeshi YODA 1971 ~
依田剛

「いらっしゃいませ」と言わなくなって、だいたい１年。
　独りで働く寂しさ（お客さんが途切れない店なら感じなかったのかも）や、なかなか外に出かけられないストレスからは解放されて、代わりに締め切りのプレッシャーと創作の苦しみが戻ってきた。創作なんて言うと大げさだけど、一応。
　このごろは「バカが見るもの」なんて言われ方をするテレビにも、僕としては微かな可能性みたいなものを まだ感じていて、取材という大義を利用した僕の個人的な楽しみを抜きにしても、番組を作る（放送する）ことで知らないたくさんの人たちと何かを共有できると思っている。“知らない誰か” が、前時代的な年配者や分別のつかない子供や、ゴシップにしか興味がない いい年した大人だったとしても、いや、だからこそ、そういう人にテレビを通して話しかけることは意味があると。
　お盆に実家で親とテレビを見ていたら、母が「こういう番組（民放の日航機墜落事故の特番）をどうしてもっと宣伝しないの？」と聞いてきた。それは母ちゃんが見なかっただけで、かなりやっていたという僕の説明に納得しない母の反論は「N・H・K・で１回も見なかった」というもので、あまりの常識シカトっぷりに顎が外れそうだった。
　常識を気にしない人（無知なだけかもしれないが）と言えば、タイに住んでいたときはタイ人の自由な発想に驚きの連続だった。デパートとかのトイレにある手を乾かす温風器を前にして、洗った手はハンカチで拭いて、濡れたハンカチを温風器で乾かす人（当然なかなか乾かないから、いつまでも温風器を占領）。ヘルメットの代わりにボウルを被ってバイクに乗る人。渋滞が我慢できなくて、客を降ろしＵターンして走り去る路線バス…。彼らは圧倒的だ。
　話が逸れた。自分とは感覚や思考の違う人に自分の考えを伝える、しかもたくさんの人に伝えられる道具を、使わない手はないと思っている。ちなみに断っておくと、報道の中立なんてありえないし、個人的には作り手の意思が伝わらない番組なんて意味がないと思っている。
　そんなことを言いながら、僕もちょくちょく意味がないものを作って、次はちゃんとしよう！なんて自分を戒めたりしている。テレビ以外の、“お客さんの言いなり仕事” も受ける。アーティストでも天才演出家でもない僕が食べていくには、そういうこともある。だけど少なくともテレビで育った僕は、テレビを “下等なメディア” 呼ばわりはしない。と、この夏決めた。

依田剛 Yoda Takeshi
1971 年生まれ長野市在住
テレビ局勤務、タイ料理店経営の後、フリーランス映像ディレクター
takeshi_yo2008@hotmail.co.jp

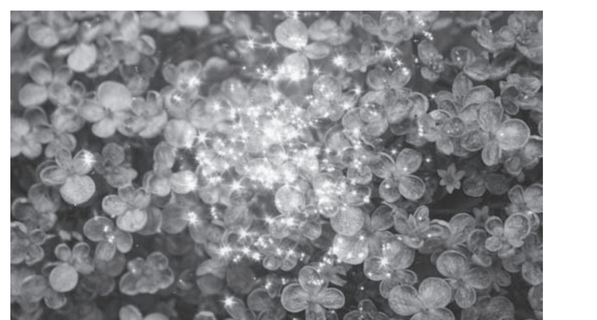


photo by Yukiko TAMURA

2014・夏の日記

Yukiko TAMURA 1986 ~
田村侑子

行く手の視力と、記憶の波。
前と後ろのようでいて
あたまの中でまあるく編まれている。

揺らめく感覚をするすると泳がせ、
９年と数ヶ月の時間をかけて
通り抜けた光景、衝動、感情、言葉。
その間
藁半紙は茶色く褪せて、
ペンのインクの油は滲み出ていた。
そこに漂う青がきれいで。

しばらく忘れていたけれど
長野の夕暮れ、山の端が蒼く染まるのは
ほんとうに綺麗。
深呼吸すると透明になっていくよう。

ひぐらしが鳴いて
変わらぬ空気がそこにいたとき

明日がやってくる気配、を
もっと新鮮に感じ取らなくては、と思った。

当たり前、ではない
時間が いま 流れているということ。

2014 年・8 月。長野にて。

田村侑子　Yukiko TAMURA
1986 年東京生まれ
長野県駒ケ根市で育ち、新潟市在住
印刷会社勤務
2009 年〜　新潟市、名古屋市にてグループ展に参加
2014 年　　新潟市にて個展 / 写真と絵
yukk_te@yahoo.co.jp

ドラムサークルの経験がレッスンを変えていく

Tomohiro SHIOTSU 1965~
塩津知広

「ああしてこうしてこれやって」と手取り足取り、次にすることが常に提示される、オウム返しのようにしてその行動をなぞればいい。それが、俗にいう「レッスン」です。

　目的は「(演奏が) 上手くなるため」。実にあいまいな目的です。が、人によりその状況はそれぞれ。学園祭ステージでの満足だったり、お気に入りの曲の演奏だったり・・・

　基本的には、「お手本」を示してそれを「マネ」する、そのくり返しが進む時間です。一音一音が（お手本と）同じように再現されるように、そのためのカラダの動かし方や気持ちの持ち方を紐解いていくのです。

　生徒さんに対しては、いわゆる「コピー」を要求します。「同じようにしましょう」と。そうすれば、目的に向けてまた一歩階段を登ることになる、と。

　しかし最近、「全く同じじゃなくたっていいんじゃないか」と思うようになりました。「お手本」を示したそのレスポンスが「ちがったモノ」でもいいんじゃないのか、それがその人なりの反応なら。

「善光寺へ行く」ということがピンポイントに「本堂の中のご本尊の前に立つ」ということでは必ずしもない、そのように、目的に向かった行動であればその幅は広く認めてもいいだろう（あまりイイ例えではないかな？）。そんな風に思えるようになってきました。

　実は、上越市で行われている「ジャンベレッスン」は、そんな思いが色濃く現れているものだと思っています。アフリカントラディショナルな楽器とリズムの練習ですがガチガチに「マネ（コピー）」を目標としてはいない、という点がそうです。

　何度も書いてきた「経験がなくても大丈夫」というドラムサークルのウェルカムな姿勢、本来「音楽」とはそうあるべきなモノです（もちろん鍛錬の上に得られる満足を否定はしませんが）。

　レッスンとドラムサークル、その二つを「似て非なる活動」と考えて、相反する内包する想いに悶々としていた数年間でしたが、最近は融合しつつ自分の中でミッションとして落ち着きそうな気配です。

　ここに、自身の演奏活動が絡んでくるのですが、それについてはまたいずれ。

　拙文、駄文、お読みいただきありがとうございました。

塩津知広 Tomohiro SHIOTSU
1965 年福岡県北九州市門司区生まれ 長野県長野市在住　音楽講師
1990 〜音楽教室講師として活動開始
2006 年〜「ドラムサークルながの」発足
drumcirclenagano@gmail.com
http://hey8tsedrums.com/dcngn/

女性性あるいは中年についての考察 7
「とりあえず一旦棚卸ししてみよう、元カレを」

Koh MATSUSHITA 1972 ~
松下 幸

　シンガポールに住むようになってから２年が過ぎた。
　先日は来星以来３度目のナショナルデーを迎え、建国を祝う空軍ショーや花火を今年も味わうつもりだったけども直前でどうでもよくなって寝て過ごしてしまった。３度目ともなると、お祭りを楽しみたい気持ちより人混みで戦闘機がやってくるのを延々待つ辛さのほうが勝ってくるのだ。
　そういう「この国への慣れ」と関係があるのか知らないが、近所を歩いていると人々が北京語で話しかけてくるようになった。
「○☒△＠＊？＞％％」
「え？」
「○☒△＠＊？＞％％！（さっきより大きな声で）」
「あの、マンダリンわからないんですが」
すると一瞬間があって、やっと英語になった相手が
「シンガポーリアンじゃないの！？」と目を剥く。
　何人？日本人？アイヨー全然見えない！あなたマンダリン勉強するといいよ、今より何でも安く買えるよ、いやー絶対チャイニーズだと思ったのに……もうこのやりとりにもすっかり慣れた。私はたった２年でローカルと間違えられる風貌になってしまったということだ。
　チャイニーズと間違われるのは、日本人的にはかなり痛い。コリアンも痛いけどチャイニーズはもっと痛い。アジア人蔑視と言われようが嫌なものは嫌だ。少なくともこの国にいる邦人でローカルと間違えられて喜ぶ人はいない。だってこちらの女性といったらブラックのセミフォーマルドレスにビーサン＆濡れ髪で出勤するような人たちだ。
　タクシーに乗って「日本人会へ」と言ってるのに「働いてるの？」と聞かれる。タクシーでおじさんのシングリッシュがキツすぎて何を言ってるか分からずにいたら「あんたチャイニーズのくせに、英語話せないなら最初っからマンダリンで話せ！」と怒られる。近所のおばさんには「あなたの顔はチャイニーズの顔。日本人じゃない」と何度も何度も言われる。
　しかし何故そう思うのか？チャイニーズシンガポーリアンの女性たちには「面長、長身、手足がすらりと長く、しかし目が小さめで鼻が低く出っ歯気味。後ろから見ると美人だけど振り向くとブス」という残念な特徴がある。私はシンガポールにいると低身長のほうだし、顔が丸くて具が濃い。後ろ姿は前よりひどいし、肌もすっかり焼けて浅黒い。もっと本気の東南アジア人と間違われるならまだしもチャイニーズと言われるのは素で解せない。
　彼らに理由を聞いてみると「背が高いから」などと言う。「高くないじゃん」と返すと急にゴニョゴニョとなって、日焼けしてるから？と聞くと「そう！」と。しかしシンガポーリアンの女性は日焼けを嫌うので色白なのだ。だけど服は袖なしにミニスカートもしくは短パンと露出が多く、こちらは大抵長袖長ズボンなので全然違う。日本人以外はほとんど着ないボーダーシャツもよく着る。なんならでかいサングラスで顔が隠れていることもある。なのに「肌がやけてるからチャイニーズかと思った」と言われるのだ。自分のチャイニーズ臭が恐ろしくなるレベルである。
　しかし最近本当の理由が思い当たるようになってきた。日本には基本日本人しかいないから「顔の日本人らしさ」なんてあってないようなものだが、シンガポールにはアジアのほぼ全ての国民が揃っている。日本にいるよりはるかに、アジア人の顔の微妙な違いが際立って見える。多分シンガポーリアンは、アジア人を見るとき無意識に「国籍あてゲーム」をしているのだと思われる。
　こちらにいる日本人女性は基本駐在さんの奥様連中ばかりで、他のどの国の人よりも分かりやすい特徴がある。服は VERY 系、顔も肩も細く、美白につとめ髪を染めてちゃんとメイクもしている「おしゃれ」な方々だ。誰が見ても「あれは日本人」と言い当てられる。私は残念ながら、その枠からは大きく外れている。言うなら「なんだかよく分からない雰囲気の東アジア人」だ。とイギリス人の知り合いにすら言われた。シンガポーリアンにとっては、日本で「この集団は中国人だな」とかはっきり分かる人以外は皆日本人に見えるように、私も「定形外」という理由でシンガポーリアンだと判定されているに違いない。というのを結論とすることにした。無難な落とし所だ。
なので最近は挨拶ぐらいだったらニーハオで返す。シンガポーリアンかと思ったという言葉は褒め言葉としてありがたく頂いている。なにせ二ヶ国語を操る本物のコスモポリタンだ。光栄ではないか。この間ベトナムでもシンガポーリアンと間違われたけど、いい方に受け止めようと努力している。
　すっかり見た目がポリアン化している私の頭のなかはというと、最近降って湧いたような色欲で一杯である。昨日見たアメリカのドラマで、80 才を超えたおばあちゃんがある日突然色気づいちゃって、目につく若い男性すべてに恋するようになり、検査したら若い頃に罹った梅毒が復活して前頭葉が破壊されていたという話を見たのだが、私もやんちゃしちゃってた頃に拾った致死的な菌に脳を壊されはじめたのかもしれない。
　きっかけはドラマだった。ある韓国人俳優（韓流スターではなく、ただのおっさん俳優）が過去に出演した韓国ドラマを漁っていたら、ちょうど 10 年前に大ファンだった映画俳優が主役の作品を発見したのだ。韓国映画にハマりはじめた当初、好きだったある監督の作品に常連として出ていた地味な映画俳優が彼だった。助演クラスだったのだが大変演技がうまいので主演クラスにまで人気が出て、でもルックスが主演の器じゃないので映画があたらずあっという間に出演作が日本に入ってこなくなった。短いブームだった。私もあっという間に他の俳優へと心変わりしていたのだが、ちょうど誰も「彼氏（好きな俳優）」がいなかった私の前に、忘れていたあの彼が５年ぶりに姿を現したのである。かなり老けていたが、老け果てている私にとっては好材料だ。そしてずば抜けた演技力は健在だった。演技のうまい俳優ほど光り輝くものはない。
「元カレ」への恋心が再燃するのは時間の問題だった。あとは寝ても覚めてもその彼のことばかり考える毎日。ほどなく日常生活にも支障をきたすレベルにまでなった。梅毒で脳を破壊されたおばあちゃんも、間違えて借りた映画に出ていたアシュトン・カッチャーに色ボケしたのがことの始まりだった。脳がおぼつかなくなってきた女にとって、いい男が出てくるドラマは甘美な猛毒だ。
　私の恋心は誰にも理解されないレベルにまで膨らんでいった。相手はドラマがヒットしたとはいえ、イケメン韓流スターとは程遠い地味男君である。年も私と２才しか違わない中年だ。他のスターよりもぐっと難易度が低い。私の見た目はシンガポーリアン化してるもののギリ、ギリギリのギリで若く（42 才が 39 才ぐらいに）見えるらしい。でも相手は 40 才なので全然クリアだ。このたるんだ体さえ何とかなれば、もしかしたら、もしかすると……何が？なんて聞かないでくださいよ。人生何が起こるかは誰にも分からないでしょう。希望を捨てなかった者だけに希望の未来が開けるのですよ！
　インタビューで知ったところによると、彼は「美人すぎない、ミディアムヘアの、パンツの似合う、仕事をしてる女性が好き」だという。過去一度だけ熱愛報道の出た相手は非整形「ブス女優」として有名な演技派女優だ。偶然にも私は美人じゃないし、一年のうち 360 日はジーンズだし、髪も中途半端な長さだし、形ばかりですが仕事もしている。条件オールクリア。これはもう、やばいでしょ。好みのタイプはシンガポール在住の君って名指しされちゃってる。それで！それで今まで彼には浮いた話もろくに出てなかったのか！
　またタチの悪いことに、私はその俳優までつてを辿れないこともないのである。たった１人だけいる韓国人の知り合いの「お兄さん」がけっこう有名な映画監督で、友だちに頼まれて俳優に会わせてあげたりもするそうで……もしかしたら、もしかすると、まだ拾っていない運命の赤い糸が、半島方面に向けて伸びているのかも？まじで？？その時は娘、ごめん。母さんおまえと離れて暮らすことになっても、一生お前を愛しているからね！！
　そんなわけで最後の恋に向かって一念発起、「トータルワークアウトの三週間ダイエット」を始めた。糖質と脂質を限界まで制限しつつ筋トレを行うダイエットで、もう、死の苦しみだった。腐った性根を一度叩き殺して真人間に生まれ変わらせるタイプの本当に辛いダイエットで、しかし私はやりとげた。そして本の言う通り、たった３週間で驚くほど体が変わった。２キロほどしか体重は落ちていないが、ウエスト、太もも、背中がすっきりして、長年着られなかったノースリーブにすら手を伸ばせるくらいには若返った。同時に「まつげ美容液」も塗り始めた。これも三週間ダイエットが終わる頃には、自分にしか分からない程度ながら結果が出た。とどめは小顔ボトックスだ。韓国人には必須というえらボトックスで小顔効果を狙う。両顎の輪郭に沿った筋肉に計 10 箇所、注射針が容赦なく「ぶすーっ」と刺さる。生まれて初めて体験するその痛みは、僅かに残った自制心を粉々にされる、変な声が出そうなものだった。これも三週間ダイエットが終わる頃には効果が出始め、えらというか頬が見たこともないくらい痩けて病人みたいな顔になったもののまあ、ドンマイ。さあこれで準備は万全、いつでも脱げるぞ韓国人カモン！
　となるところでしたが、ドラマがね、彼の次のドラマが大コケしまして。今世紀で２番めの低視聴率という記録的偉業を達成しまして、拝見したところ彼の仕事は相変わらずよかったけど話が。しょぼい。すると彼に対する心の勃起があっという間に萎れてしまうというか。仕事で輝く地味男が好きなのに、仕事が失敗しちゃあ、どうも。
　そこで困ったのはこの体だ。どうするんだと。せっかく努力したのに、どの方面に向けて威力を発揮していいのか分からない。私は誰かに見せたいのである。脱ぎたい。いや脱がなくてもいい、褒められたい。きれいだねーとか言われたい。久しく聞いてない褒め言葉を並べられて、お互い見つめ合ってポーッととかしたい。

悶々とする気持ちを持て余していたところに、私の友人のなかで最もダメな同い年の女からしょうもない LINE が大量に送られてくるようになった。曰く
「32 才の男子から言い寄られて困っている。イケメンじゃないけど背が高い」
「結婚を約束してる 39 才の彼女さんがいるって。でもすごく優しい」
「断りきれず、昨日の夜、デートしちゃった」
「お互いに求め合うって感じでついキスしちゃった」
「さっき給湯室にいたら急に入ってきて、ちゅってされた」
「ホテルに誘われてるけど、絶対それは無理」
「私にこれ以上夢中になられたら困るから」
「私にも彼氏がいるし、彼との関係は遊びだって割り切ってるし」
「でも本気になっちゃうかも」
普通これらの文言を読めば、39 才と 42 才を二股にかける 32 才なんて、随分老け専のゲス野郎だな、としか思えない。しかし老け専という言葉はいくら相手が親友であっても言いづらい。とはいえその関係は限りなく見苦しい。不惑の女が決して落ちてはいけない肥溜めに嵌っているんだけど見苦しすぎて指摘できない。けど 32 才に誘われるというのは私の人生にはもう二度と起こらないことで、彼女は見た目は年なりだけどすごく色気があって、やっぱり男を求める必要がある女は外に出てくるものが全然ちがうようなあ、藤田紀子だって二子山親方を捨てる辺りからは得体のしれない色気が半端ないもんなあ、そういうのの使い道がわんさかあって、いいなあ…なんて思ってる間にも LINE の着信音がバンバン鳴る。鳴り続ける。昼も夜も。ある時イライラが爆発しそうになって、しかし喧嘩はしたくないのでかろうじて「いいねえ、その年でいろんな男性に言い寄られて、何か危ないフェロモンでも出てるのかねえ」なんてギリギリの嫌味を言ったところ、
「コウちゃんだってまだかわいいよ。出るとこに出ればすごくモテるって」
出た。出たよー「出るところに出れば」。「まだかわいい」。出るとこってどこよ、私は限界まで出尽くしてるよ。何その上から目線、老け専に二股掛けられていい女気取ってんじゃねーぞ！と、嫉妬と苛立ちがごちゃ混ぜになった致命的な罵りを親友にぶつけてしまいそうになったので、罵るかわりに既読無視の刑に処してしばし放置することにした。

　そんなしょぼすぎる軋轢を友人との間に抱えている時、別の友人から「FB で元カレと再会した」という話が舞い込んできた。なんかこう、気づいたら共通の友人でつながっていて、どちらからともなくメッセージを送りあうようになり、今度２人で会うことになったんだよねーとかなんとか。
　これか。これが噂の。やっぱこれよね！と膝を打った。
　思い返せば、既婚女性の恋愛といったら「同窓会」で再会した「同級生」だ。書道の講師としてカルチャーセンターで教えていたら雑誌編集者と恋に落ちて喪服のまま、という線も捨てきれないけど今から書道の師範になっている時間はないし、近所の旦那さんという設定もよく見るがうちの隣の旦那さんはかなりの変人で、その隣はサンタぐらい大きい初老のアメリカ人なのでなし。左隣のシンガポーリアンの旦那さんは、いつもステテコ一枚で非常階段に座ってたばこを吸っていらっしゃる。なし。あとは夫の同僚の線だが上司も部下も同僚も太めのインド人ばかりなのでちょっと無理だ。名前を覚えるのも難しい。というか、この年になるとまず新しい男は無理だよね、と、聞ける友だちにざっと聞いてみたところ大多数がそう言った。特に若い男は絶対無理だと。もともと繋がりのあった男性を引っ張りだして来る以外に相手を見つける術はないと。となるとやっぱり、学校が同じだった元カレというのが一番繋がりやすい。その点私のダメな友だちはすごい。彼女はすごいファイターだ。ただ会社に転勤してきた若いのにあっという間に食われちまうなんて。私のような腰抜けには、仮に万が一誘われたとしても尻尾が巻けちゃって何もできない。
　そこで物は試し、FB で思いつく名前を検索してみたのである。さすが 21 世紀になって 15 年近くも経つとすごい。同窓会と同じ役目を FB などの SNS が今ココというタイミングで果たしてくれるのだ。便利になったもんです。そして、女も年をとると恥も外聞もないというか、ほんとなんでもできるようになってしまうんですね。30 代なら浅ましくて絶対できなかったと思うのだけど、何の抵抗もなくするするっと出来てしまった。といっても、会ってもいいなと思う元カレは２人しかいなかった。１人は高校の同級生で、もう１人は大学時代の友人。そして、ものの数分で２人とも見つけてしまった。生き馬の目を抜く勢いだ。
SNS というのは、恐ろしいところですよお父さん。（Part2 へつづく）

松下 幸　MATSUSHITA KOH ※ペンネーム
1972 年福岡市生まれ シンガポール在住 コピーライターのようなもの
大学中退→フリーター→主婦→フリーター→会社員→フリーランス
catpaw@gmail.com

information

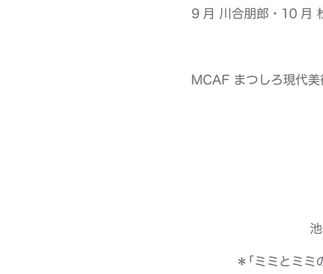
トポス高地 2014
9 月 川合朋郎・10 月 松田朕佳・11 月 松本直樹・12 月 丸山玄太
アリコ・ルージュ / 飯綱東高原
http://toposnet.com

MCAF まつしろ現代美術フェスティバル「ものとしてあるかたち」
松本直樹・木村仁・他
9/13~9/23
長野市松代町
http://mcaf.me

マツシロオルタナティブ 2014 avec
8/3~9/30
松田朕佳・川合朋郎
池田満寿夫美術館 エントランスホール・中庭
http://matsushiroalternative.com/
＊「ミミとミミの間に広がる大海に 寄せては還すナミの音」
9/21 16:00~17:00
松田朕佳（パフォーマンス）・北島千夏子（ダンス）・コラボレーション
観覧料￥500

松田朕佳展 2014 年 10 月
FLAT FILE

オブセオルタナティブ 2014 avec
11/16~11/23
松本直樹・吉村正美
おぶせミュージアム中島千波館 木造館
http://obusealternative.com/



新名所旧跡案内「松代大本営跡」

Masato IKEDA 1943 ~
池田正人

「国体」を構成する集団（天皇一家、軍人、政府の役人）の避難場所

「万世一系の天皇」と称される天皇制は、672 年に壬申の乱で勝利した天武天皇が実質的に権力を掌握し、国を統治した時が最高であった。以後、藤原一族や徳川軍事独裁政権が政治を支配し、明治に至っては長州グループを中心とした派閥が天皇を「神」に祭り上げ、自分達の意のままに日本を支配した。富国強兵のスローガンのもと日中戦争、太平洋戦争を戦ったが残念ながら米国を中心とした連合軍に惨敗した。

1945 年７月 26 日の米・英・中国（ソ連抜き）が日本に無条件降伏をせまるポツダム宣言に対し、軍官僚、政府官僚たちは「天皇の地位に変更を加えないこと、すなわち『国体護持』を条件にする」ことを求め黙殺したため広島、長崎へ原爆を投下され、ソ連の参戦を許した。一方、国民は 1945 年６月に義勇兵役法が施行され、軍も国民も一丸になり「一億総特攻」の掛け声の中、軍や軍需産業に動員されず家庭に残っている者も、男女を問わず国民義勇軍として地下壕への避難ではなく、郷土の警備にあたることになった。

松代大本営跡は日本の「国体」を構成していた集団（天皇一家、軍官僚、政府官僚）を明示してくれる貴重な歴史的な遺産である。世界文化遺産に登録申請してもよいのではないか。

松代・舞鶴山 参謀本部入居予定壕 現在気象庁地震観測所）

松代大本営の概要

松代大本営と称された地下坑道や、現庁舎を含むその他の施設群は昭和 19 年 11 月に着工しましたが、昭和 20 年８月の終戦とともに中止され、工事は全行程の 75% 進んだところで打切られました。地下坑道の総延長は約 10.4km、これに有した工費は当時の金額で２億円、動員された人員は述べ 300 万人に達しました。各地下坑道の所在と使用計画は次のとおりです。

場所	坑道延長	使用目的
象山	5.900m	政府各省庁
舞鶴山	2.800m	御座所、参謀本部、学習院
皆神山	1.900m	軍司令部

池田正人　Masato Ikeda
1943 生れ、長野市在住
八十二文化財団
信州大学大学院地域社会イニシアティブ修了
現在　おぶせ藤岡牧夫美術館・理事

謝り続けることに就ひて、
または真澄アーティストラベル二〇一四に就ひて

Biwa TAKAHASHI 1972 ~
たかはしびわ

左：すみません　飲んだくれバージョン（2014）DVD、9 分 38 秒
右：真澄アーティストラベル 2014
（使用作品：支須庭那寺障壁画『仇無の創造』(2009) Duo・アクリル・F4 キャンバス ×3）

　我が映像作品に「すみませぬ」とまうすものあり。
　唯、すみませぬすみませぬと謝り続ける齢四十を越えしをとこの姿を捉へし、二〇一三年の作なり。
　此度、諏訪の宮坂醸造株式会社と追分の芸術計画（あーとぷろじぇくと）沙庭の共同企画によりて、我が flashes を宮坂醸造の酒「真澄」に使用せし「真澄アーティストラベル二〇一四」が売りだされき。其れを記念せし展覧を宮坂醸造にて開き侍りし。其れに合はせて、新作として「すみませぬ　飲んだくれ版」なる映像作品を作りき。
　飲んだくれ版とは、真澄アーティストラベル二〇一四を飲みながら、先のをとこがすみませぬを連呼せし姿を捉へしものなり。
「すみませぬ」の由来は、「すむ」を打ち消して「すまぬ」となり、其れを丁寧にまうせしものなり。「すむ」は「済む」「澄む」なり。
　謝り続けるはひとへに済まむ、澄まむが為なり。「真澄」を用ゐて澄みませぬを連呼するは、真に澄まむが為なり。
　真澄を「すみませぬ」に用ゐること、正にまさしとおぼゆ。

真澄アーティストラベル 2014
分類／純米吟醸
アルコール分／ 13 度
米の品種／長野県産「美山錦」・兵庫県産「山田錦」
精米歩合／ 55%
容量／ 720ml
＊クリアケース入り
2,160 円（税込）

蔵元ショップセラ真澄など諏訪地域のお店、真澄 WEB ショップ
http://www.masumi.jp/sakemasumi/7.1/22/、加えてツルヤ軽井沢店にても販売しをり侍り。

たかはしびわ Biwa Takahashi 画家 1972 年東京都生まれ　長野県在住
長野二紀会会員　日本ペンギン党党員
1997 武蔵野美術大学油絵学科卒業
2006.7 〜『週刊さくだいら』にて『さくだいら美術探訪』隔週連載
（2008 年７月から４週に一度の掲載）
2007　信濃毎日新聞短歌欄イラスト担当
たかはしびわのページ http://takahashibiwa.web.fc2.com

分枝 branching
http://branching.jp
branching 10
publish : 09,September.2014